

ヒッチハイカー

The Little Hitchhiker by Zoomany



よく晴れた夏の日、ぼくは隣町まで買い物をするために車を走らせていた。音楽を鳴らしながら突っ走ると、開けっ放しにした窓から心地よい風が吹き込んでくる。ご機嫌でスピードをあげていたら、歩道に親指を立てている女の子に気づいた。

普通だったら、見知らぬヒッチハイカーを乗せたりはしないのだが、その日は魔が差したとしか言いようがない。というより、小柄でセクシーな女の子に親指を立てられたら、そこでブレーキを踏まないほうがおかしい。そうじゃない？

車を止めると、彼女は走り寄ってきて、「どこまでいくの？」と訊ねた。ぼくが行き先を告げると、「完璧！ 乗せてくれるよね」と手を叩き、それから道端においた荷物を取ってきて車に乗り込んだ。

間近で見る彼女は、すごい美少女だった。カールしたブロンドの長髪。睫毛のながいブルーの瞳。思わず触れたくなるようなピンクの唇。柔らかく滑らかそうな肌。とても小柄だった。たぶん155〜6センチくらいだろう。とてもスリムだったが、形のいい胸の谷間がシャツの胸元から覗いていた。

彼女が長旅の途中だということは、ぼさぼさの髪の毛や、汚れて皺だらけのシャツから察せられた。匂うほどではなかったが、いわゆる旅塵にまみれて、というやつだ。ジーンズのホットパンツから細くしなやかな脚のび、ブーツをはいていた。

彼女はけっこうお喋りだった。ぼくらは、各々の趣味を語り、カーラジオから流れてくる音楽がナイスだと言いつつ合った。

目的地はどこなの？ と訊ねると、彼女は、

「ううん。夏の間は、あてもなく一人旅をするの」

と答えた。また会話を続けていくうちに、すっかり打ち解けてしまったぼくは、もし、ピックアップしてくれた男とトラブルになったらどうするの？ それに、交通費や食費はどうしてるの？ と訊ねた。

「最初はいろいろトラブったよ」

と彼女は答えた。

「でも、いまは大丈夫。そんなときどうしたらいいか、ちゃんと覚えたから」というと？

「口か手でしてあげるの」

え？ ぼくはどぎまぎした。

「それ以上はお断りよ」

彼女がそう語っている間、ぼくのペニスは大きくなりはじめた。どう見ても十六歳以上には見えない美少女が、フェラチオしながら旅をしているというのだから。

それじゃ……。

「え？」

僕の唇はからからだった。声がいわがれた。ぼくのも、口でしてくれる？

彼女の唇に微笑が広がり、彼女の視線がぼくの股間に落ちた。

「すてき。こういうの好きよ」

彼女は、ぼくのズボンにできた盛り上がりを見つめながら言った。

なんて運がいいんだ！

ぼくは車を右折させ、幹線道路からは森で遮られて見えない、人けのない側道に入って車を停めた。彼女は、シャツのボタンをはずした。発達した二つの乳房が露になった。きれいなピンク色の乳首がつんと上を向いていた。

彼女は手をのばし、ぼくの股間に触れ、ズボン越しにペニスを愛撫しはじめた。それだけでぼくはもう、射精しそうになった。彼女はズボンのジッパーをおろし、怒張したぼくのペニスを引っ張りだし、我慢汁を潤滑油がわりして、しごきはじめた。ぼくはズボンを脱ぎ捨てようとした

が、窮屈な運転席ではなかなか身動きがとれなかった。

彼女は、あの薄い微笑みを浮かべてぼくを見つめた。青い美しい瞳。天使のような容貌。彼女は、下唇を嘗め、それから無言でぼくの股間に顔を埋め、唇で優しくぼくのペニスを包んだ。それから、ペニスの先端が彼女の喉の奥に触れるほど、深く呑み込んだ。

ぼくは手を延ばし、彼女の乳房を揉んだり、乳首をいじくったりした。彼女は身をよじらさせ、ペニスを加えた口の奥でうめき声を漏らした。

すでに射精寸前だった。さらに彼女は、左の掌で陰囊全体を包み込み、ゆっくりとゆすぶった。それが、ますますオルガズムに向かって興奮を加速させた。ぼくは思わず叫びそうになった。そのとき。

彼女は思い切りぼくの陰囊を引っ張った。激痛が睾丸から下腹部へと突き抜けた。

同時に、彼女は右手の拳を固めて、ぼくの陰囊に叩きつけた。根元を絞られていたため、パンチがまともに睾丸を襲った。

どうすることもできなかった。

彼女は野獣のように歯を剥き出し、唇から唾液を垂らしながら、ぼくの睾丸を少なくとも10回は殴ったのだ。車が激しく揺れた。

地獄のような苦痛。だが、どうにもならなかった。

ぼくが股間を抑えて悶絶している間に、彼女は素早く車を飛び出し、運転席のほうに駆け寄った。それからドアを開け、ぼくの頭髪をつかんで車から引きずりだした。ぼくはフロントまでひきずられ、バンパーの上に押し倒された。

彼女の手にロープが握られていた。ぼくは身を起こそうとした。彼女はすかさず、ブーツの先でぼくの股間を蹴りあげた。すでに痛めつけられた睾丸に新たな痛撃。ぼくは動けなくなった。

彼女はぼくの両腕を広げさせ、バンパーにきつく縛りつけた。それから、森の中に消えた。戻ってきたとき、彼女は長さ1メートルばかりの枝を持っていた。彼女はぼくの両脚が開いた形で、足首を枝に縛りつけた。

激しい苦痛と嘔吐が、ぼくの体から抵抗する力を奪っていた。彼女は、地面にあぐらをかいて座り、にやにやしながらぼくの萎れてしまったペニスを眺めていた。

それから、彼女は右手をのぼし、ぼくの左の睾丸を包み込み、優しく掌のなかで転がしはじめた。彼女の顔に微笑が戻ってきた。

彼女の気が変わったのだろうか？ また、フェラチオしてくれるのだろうか？ 彼女はこういう荒っぽいやり方が好きなのだろうか……。

ぼくのペニスは再び勃起しはじめた。睾丸はひどく痛んだが、いまにも射精しそうになった。

「私ね」

彼女は、ぼくを刺激しつつげながら口を開いた。

「ほんとうはレズビアンなの……」

そういいながら、睾丸を弄ぶ掌に力をこめはじめた。

「男は大嫌いな」

ぎゅっと彼女は睾丸をひねった。ぼくは苦痛のあまり悲鳴をあげた。

「大嫌い。むかつく。男は自分が世界を牛耳ってると思ってるんだもの。この金玉とペニスも、大嫌い……」

言いながら、彼女は残忍にもぼくのペニスを血が出るほど手ひどくつねった。

「だから、こうして罰してあげてるの。だいじょうぶ、ちゃんと抜いてあげる。男として最後の快感を味わわせてあげるから」

言いながら、彼女は再びぼくのペニスに唇を寄せ、驚くべきテクニクでしゃぶりはじめた。だが、射精しそうになると、必ず彼女はフェラチオをやめてしまうのだ。

そんなことを10回は繰り返しただろうか。彼女はぼくが放出する寸前にフェラチオをやめる。彼女はずつと掌でぼくの睾丸をやわらかく転がしているが、フェラチオをやめると同時に、手ひどくひねりあげ、ぼくは絶叫する。

10回目の寸止めの後、彼女はさらに強く、睾丸に立てた爪をのめりこませはじめた。ぼくは絶叫したが、彼女は笑って鼻唄をうたいながら、ますます力をこめた。

ぶしゅつと、なにかが破裂したような音がした。

彼女の爪が、陰囊を突き抜け、ぼくの睾丸に突き刺さったのだ。

信じられない、筆舌に尽くしがたい激痛だった。

「いくよ」

彼女は素晴らしい、手をのぼして石を拾い上げ、ぼくの陰囊を載せた。それから立ち上がり、血を吹き出しているぼくの睾丸にブーツの踵をのせ、ゆつくりと体重をかけはじめた。

ぐしゃつ！

ぼくの左の睾丸はマッシュポテトのように潰れてしまった。

その瞬間、ぼくのペニスの先端から、血の混じった精液が迸り出た。彼女は、手慣れた感じで、精液がかからぬよう飛び下がった。

断末魔の激痛に痙攣するぼくを樂しげに見やりながら、彼女は再び地面に腰をおろし、微笑みながら言った。

「もうじき、このちっちゃなペニスは使いものにならなくなるのよ。金玉を潰された男は、気が弱くなって、なんでも人のいいなりになっちゃうの。そういう男が増えれば、私たちにとって、とても生きやすい世の中になるはずよ」

ぼくは呻いた。全身が激痛と悪寒に苛まれ、声がなかなか出なかった。やめてくれ……。ぼくは、誰も傷つけたことなんか……。頼むから、一個だけは残しておいてくれ……。

自分でも驚くほど、甲高い声だった。

彼女は笑って首を振り、

「嘘つき。あんた、男なんだもん。絶対に、女を傷つけてるはず」

と言いながら、残った右の鞆丸をつかんだ。

彼女は、ぐいと強く鞆丸を引つ張った。ぼくのお尻や背中が持ち上げられて浮いてしまうくらい、容赦なく引つ張ったのだ。不意に彼女は手を離れた。

「いいアイデア、めっけ！」

彼女はポケットからナイフを取り出し、ぼくの陰囊を切り裂きはじめた。血と、一個だけ残った鞆丸が切れ目から飛び出した。彼女は手をのぼして、剥き出しの鞆丸をつまみ、固さを確かめるように転がした。そして、ナイフの切っ先で突っ付きはじめたのだ。少なくとも1ダースの穴が、ぼくの鞆丸に開けられた。それから、両手の掌で鞆丸を包み込むようにして、指と指を絡ませ、強く圧迫しはじめた。彼女はじつとぼくの眼を覗き込み、笑いだした。彼女の眼には、愉悦と軽蔑がないまぜになった感情が浮かんでいた。彼女は、彼女の両手が鞆丸を破裂させてしまうまで、じつとぼくを見つめつづけた。

ついに、残った一つの鞆丸は、彼女の両手のなかでぐちゃぐちゃに潰れた。彼女は哄笑し、左右の掌をぼくの目の前につきつけ、鞆丸の「残骸」を見せつけた。それから、その残骸を地面に落とし、ブーツで跡形もないように踏みじった。そして、ぼくのシャツで両手を拭った……。

ぼくの記憶はそこで途切れている。

再び目覚めたとき、ぼくは地面に転がっていた。車はなかった。すでにロープは解かれていたが、ペニスの根元に、小さく蝶結びにしてあった。まるで、潰れてしまったぼくの鞆丸のかわり、とでもいうように。

ぼくはなんとか、幹線道路までたどり着き、運良く走ってきたパトロールカーに拾われた。警官は、下半身を剥き出しにしてうろついているぼくを逮捕するつもりだったらしいが、すぐにぼくの股間の重傷に気づき、病院に連れていってくれた。その途中、警官は、ぼくの鞆丸を潰した女の子をずっと捜索しているのだが、まだ逮捕できないでいる、と語った。

彼女から手紙が届いたのは数週間後だった。車のフロントボックスにあった運転免許証からぼくの住所を知ったのだろう。封筒のなかにはポラロイド写真が入っていた。写真には、彼女の顔が映っていた。鞆丸を二つ、まるでサ克蘭ボウのように歯でくわえていた。こう書き添えてあった。

替わりの金玉を見つけてあげたよ。でも、やっぱりあげない。これから、どんな味がするか、試してみるの。